

書
評

杉山一之 気象と天災
A 5 291 頁, 口絵 8 頁
350 円 偕成社

気象現象は人生に関係が深い。台風のため家屋を吹き倒されたとか、豪雨のため水が出て家財が流失したとかいうことは、年々歳々あることで、その都度物資の損失はばく大なものがあるが、それとともに人命の損失も決して少くない。これらの天災は人力では防止することは困難であるが、これを軽減することは可能である。それには気象現象の本質をきわめ、その起す災害の性情を飲み込んでおくのが早道である。

本書では気象現象の一般を平易に説明し、気象の災害を詳しく記述し、多数の挿絵を入れて理解を容易にしてある。故に気象通論であると共に気象図譜である。されば挿絵だけを見ても内容の一斑は判る。しかし本文はきわめて判り易く書いてあるから、読めばおもしろく且つ有益である。ただ学理に関する事項は正確を期して執筆されたと見えて、少々むつかしいところもある。要するにこの書物によれば気象学の概要を会得し、気象災害の軽減の手段の暗示を得ることができる。しかも巻中には地震と震災のことをも説いてあるのは、気象災害国民であるとともに震災国民でもある我々にはまことに有り難い。敢えて御閲読を広く御薦めする。
(岡田武松)

東 晃 雨を降らせる話
岩波新書 209 頁 100 円
岩波書店

廿年ほど前、英国の湖に前世期の動物が現わるとか、そんなことはあり得ないとかの議論が新聞紙上を賑わした頃、中谷先生がお茶のみ話に新聞記者を遠ざけなければ真面目な研究ができるものではないともらされたことを覚えている。近年人工降雨の問題が面映ゆい位にジャーナリズムにもはやされているので、つい昔の話を思い出したが、世論が研

究遂行上の大きな推進力となっている現在ではやむを得ないことも知れない。

降雨量が人力で左右されるかも知れないとなると、雨の多いにつけ少いにつけ生命財産にじかに脅威を感じるような昨今の我国では、この問題は当事者ばかりではなく一般にとっても眞剣な問題である。それでは人工降雨は果して可能かそれとも不可能かと開きなおられると、専門家といえども一般になつてくのゆくような、しかも良心的な答はおいそれと出来るものではない。経済問題を抜きにしても、かんじんの降雨機巧にはまだまだ判らないところが多い一方、この分野の物理気象学が現に異常な速度で前進中で、これを追いかけるのに忙殺されているからである。現在までのところでよいから誰か整めてくれる人がないかというのは実は専門家の方からの願でもあった。

本書は正にこの要望に答えるもので、著者は北大中谷教室の恵まれた環境にあって降雨機巧に関する豊富な各国文献の中から本質的なものをえらんで解説してこの分野の進展の大筋をわかりやすく説明し、降雨機巧問題ひいては人工降雨術が現在如何なる点で壁にぶつかっているかを明かにすることに重点をおき、今後如何にして壁をつきくずして行くべきかを暗示している。一読して、一見実用的なこの問題が如何にも物理学や気象学に密着し、そして人工降雨の問いに答えるにはどうしても200 頁の分量が必要であることが了解されるであろう。わかり易い解説にもかかわらず内容が広はんでしかも、精確を期してあるので、これに引用文献がついていたらとのぜい沢な希望も出てくるが、書物の性質上やむをえないことであろう。それよりもこの問題が広く読者に理解されることの方が遙かに望ましいからである。
(孫野長治)

著者・海野治良
写真・八木 治 スキー教室
構成・岡部一彦
B6 104頁 180円 山と溪谷社

くとにかく手にしてごらん下さい。実に楽しい本です。表紙から、とびら、目次とめくって行って奥付を見て裏表紙まで、なんど見てもいい本ですよ。>といたい。この本をポケットに入れて、冬山を歩きたい気持が、どうにもならない誘惑のようにせまってくる、そういう本である。はじめてスキーをはく人も、はじめの数ページを読んで歩き、読んで転び、読んで登れるであろう。上手になった人はロウティションと前傾について理解し、ギャップの通過や斜面に依る姿勢の変化の写真をみつめて研究できる。平行ターンとステムターンの二つの方向は、いずれもスキー技術の内では同じように重要なものであると数えられる。また水の流れるようなリズムカルな一連の動作を写真ですぐ理解できるように説く。本書はまえがきに書かれているように、「いまだかつてなかったスキー人形を使った技術の解説書」であり、「魂のない人形を写して、それに魂を吹き込み、スキーのうごきや人の動的な感じや、雪の上のムードや感覚を出すことに苦心」している。おしまいにほんのちょっと書いてある「写真撮影について」(八木治)、「雑感」(岡部一彦)までが心にくいまで示唆にとんでいる。
(伊東暈自)